

雲の種類とお天気

雲はいろんな形（種類）がありますが、基本的な10種類の雲形について解説します。
この10種類の雲形というのは航空気象で使う10種雲形を採用しました。
その他に、地上観測では27種類に分類して観測する27種雲形というものもあります。

10種雲形

区分	雲形	記号	通常出現する高度	雲粒の形態	その他
上層雲	絹雲 cirrus	CI	約6000m以上	氷晶	すじ雲、真綿のような雲
	絹層雲 cirrostratus	CS			ベール状の雲
	絹積雲 cirrocumulus	CC			うろこのような雲
中層雲	高積雲 altocumulus	AC	約2000~6000m	氷晶及び水滴	うろこ雲・ひつじ雲
	高層雲 altostoratus	AS			おぼろ雲
	乱層雲 nimbostratus	NS			下層に出現することがある
下層雲	積乱雲 cumulonimbus	CB	約2000m以下	水滴	雷雲・入道雲・かなとこ雲 雲頂は圏界面にまで達する
	積雲 cumulus	CU			綿雲・入道雲(雄大積雲)
	層積雲 stratocumulus	SC			鯖雲
	層雲 stratus	ST			霧雲

雲形と俗称をまとめた表

雲の形とその俗称	
雲形	俗称
絹雲	すじ雲・真綿雲
絹積雲	うろこ雲・さば雲・まだら雲
絹層雲	うす雲
高積雲	うろこ雲・さば雲・ひつじ雲・むら雲
高層雲	おぼろ雲
乱層雲	雨雲・雪雲
層積雲	くもり雲・うね雲・むら雲
層雲	霧雲
積雲	わた雲・つみ雲・入道雲
積乱雲	入道雲・かなとこ雲・雷雲

雲はその形によって様々な呼び方がありますが、地方によっては呼び方に違いがあるかもしれない、いわゆる俗称です。正式な名前と俗称と実際の形を比較しながら覚えることもひとつの方法です。

絹雲（巻雲） cirrus

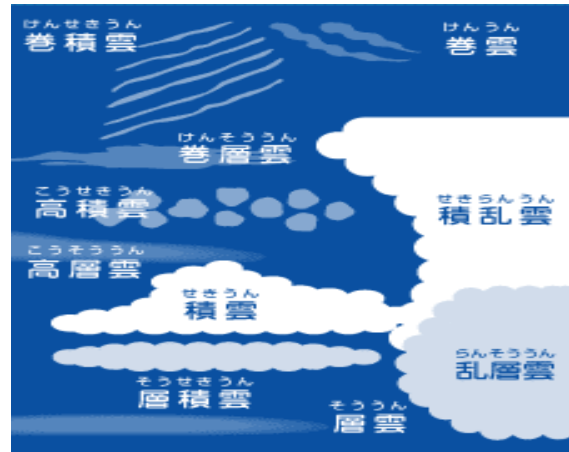
すじ雲とも呼ばれています。晴天の中に刷毛ではいたような雲を見かけますが絹雲の基本的な形です。ほかの雲もそうですが、この雲を見ているといろいろな形ができるので飽きません。特に大きく天気を崩す雲ではありません。



絹層雲 cirrostratus

薄雲と呼ばれる、ベール状の雲。太陽がはっきりと透けて見えるほど薄い雲だが氷晶の粒でできているので**日傘ができるのが特徴**。この雲は、低気圧の前面、温暖前線の前面に発生するので、天気は下り坂。明日は雨と判断しても良さそうです。





絹積雲 cirrocumulus

絹（巻）積雲の「積」という字は積雲、高積雲にも出てくるが、塊とか積み重なるという意味である。だから雲の名前を見ただけでどんな雲なのか判断できる。絹積雲が一番高いところでできる積雲なのです。さすがにこの高度となると対流も少なく大きな塊とはならないようです。

鱗雲とか羊雲とか呼ばれているようです。この雲が広がる傾向にあるときは、明日は雨でしょう。



高積雲 altocumulus

ひつじ雲などと呼ばれているが秋の空にぴったりのかんじがする。北斎の絵に赤富士というのがあるがそこに描かれている雲はまさしく高積雲である。この雲がだんだんと広がり、隙間がなくなる傾向であれば雨が近いことを表している。



高層雲 altostoratus

磨りガラスを通したように太陽の位置が見えるが日傘は出ないのが特徴。低気圧や温暖前線の接近に伴って絹層雲から高層雲と変化することが多い。絹層雲と同じように太陽が透けて見えるが、この雲は水滴からできているので傘ができない。だんだんと太陽の位置が見えなくなったら雨が近いことを表している。



乱層雲 nimbostratus

一般に**雨雲**と呼ばれています。低気圧や温暖前線の接近で高積雲や高層雲がだんだん厚みを増してついには雨を降らすこととなりますが、雨が降り始めたら乱層雲になったとして良いでしょう。雲形的に似ているのが厚みを増した高層雲です。まだ雨が降らないときは高層雲として観測しますが、雨が降り始めたら乱層雲として観測します。



積乱雲 cumulonimbus

入道雲とか**雷雲**とされています。

夏の午後にモクモクとわき上がる雲は、その雲の頂は10キロメートル以上に達することもあります。雲の中ではもっとも気性の激しい雲といえるでしょう。

雨はもちろんのこと雷やひょうなどを降らせることもあり、時には竜巻を発生させることもある。

落雷での死亡事故はこの積乱雲がもたらすもの。こんな形の雲が見えたら雷の起きやすい気象状態といえるので特に山岳地帯や海岸での活動には十分注意しましょう。

この雲の下では激しい雨や突風、落雷が起きます。キャンプや溪流釣りなどで、上流域にこの雲を見かけたら増水や鉄砲水の可能性も考えましょう。

アウトドアでは一番危険な雲といえるでしょう。



積雲 cumulus

綿雲とか積み雲と呼ばれ、晴天の日中に一つ二つ浮かんでいることもあれば、午後、雲の厚さを増してにわか雨を降らせることもある。不安定な大気の状態の時は、午前中穏和な積雲に見えても午後になり積乱雲に発達し、雷や雷雨、突風を伴うことがあるので安心できない。



層積雲 stratocumulus

うね雲とかむら雲とか呼ばれているようですが、はっきりとしたことはわかりません。雲形が示すように積雲と層雲の中間的な雲。この雲自体で雨を降らすことはないが、高気圧の縁辺部(南岸)にできたこの雲が厚くなり、霧雨を降らせることがある。気層が比較的安定しているときにできるが、気圧の谷の接近と重なると乱層雲に変わることもある。一般的にわかりやすいのは、日中の積雲が日暮れとともに対流活動が収まってできる夕暮れ層積雲である。



層雲 stratus

霧雲とも呼ばれているようです。霧と雲の違いは地面と接しているかいないかの差ですから、朝霧が気温の上昇とともに解消して行くときのそんな情景を思い浮かべてください。霧が晴れていくときにできる雲ともいえそうですが、その他、乱層雲の下や積乱雲の下にもよく見られ、こちらの方は雨しぶきの影響によるものです。





観天望気と天気の諺集

観天望気は、簡単にいうと空を見て天気の移り変わりを推測することです。

天気図のなかった時代、人々は色々な自然の変化をとらえてお天気を予測していました。その経験則を諺にしたのが天気諺（天気俚諺とも言う）です。気象予報が発達した現代ですが、天気諺は今でも立派に使えるのです。

観天望気をすることによって、あなたも予報官になれるかも。そこまでいかないまでも、知っているのと得する天気予報の裏技です。

- 山に笠雲かかれば雨・風の前兆(高積雲)
- 24時間以内に雨になる怖い吊し雲(高積雲)
- 大がさかぶりは雨の兆し(絹層雲)
- 飛行機雲は天気の変わる兆し
- 三杯雷(積乱雲)
- ひつじ雲は雨を呼ぶ(高積雲)
- 鱗雲と厚化粧の女(巻積雲)
- すじ雲が西に進めば晴天が続く(絹雲)
- 綿雲は晴れる(積雲)
- 「すじ雲」出れば冬到来
- かなとこ雲は恐ろしい(積乱雲)
- 山と雲に隙間が空くと雨(層雲系の雲)
- 雲中に大音響あれば大雪の兆し
- 暑さ寒さも彼岸まで
- 一吹き百万国
- 朝雨は女の腕まくり
- 夏の南風は晴れ
- 田舎のばあさんとマジ(南)の風は手ぶらじゃこん(宮崎県)
- 浅間の噴煙が北西に傾けば雨、南なら晴れ
- 大島の噴煙が東にたなびくと、明日はイナサ(南の沖合)が荒れる
- 秋の台風は韋駄天で風が強い

- 北西季節風が強ければ晴れる(冬、太平洋側)
- 蒸し暑い南風、翌日は雨。(夏以外の季節)
- 夕焼けは晴れ
- 東の雷、雨降らず
- 星が激しくまばたと風が強くなる
- 朝ニジは雨、夕ニジは晴れの前兆
- 朝霧は晴れ
- 遠くの音が大きく聞こえたら雨
- 櫛が通りにくい日は天気が崩れる
- 朝暖かく感じたら雨
- 八十八夜の別れ霜
- 雀が朝早くさえずるときは晴れ
- 雀が水浴びすると晴れ
- 雨蛙が鳴くと雨
- 蚊柱を立てば雨の訪れ
- ひばりが高く昇ると晴れ
- ツバメが低く飛ぶと雨が近い
- 蟻の道渡りは雨の降る前触れ
- 雷三日

雲のできるわけ

1. 空気が上昇すること (上昇気流のできる4つのパターン)
2. 水蒸気が含まれていること (水蒸気が冷やされると水滴や氷の結晶ができる)
3. 水蒸気を含んだ空気が冷やされること(上空ほど温度が低い)

